



おちほ

第95号 令和5年3月1日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 太田 正 則
TEL 0748-77-2299 FAX 0748-77-5588 <http://ochiho.noor.jp/>

多機能型地域生活支援棟 完成！



令和三年十一月より工事を開始しております多機能型地域生活支援棟の工事が五月末完成・竣工・引き渡しが行われました。

この建物は、入所機能における高齢化や障害の重度化により現在入所されている利用者様が安心して生活する為に住み分けが必要となり増改築が始まりました。

工事期間中は、居宅介護事業は現存する建物を仮事務所とし、通所生活介護事業は極寒のさ中仮設住宅で支援を受入れ、施設入所の方は居室のすぐ横やグラウンドに立てられたフェンスや工事音により圧迫感を感じる中での生活をされていました。

完成後は、入所は男子棟・女子棟・多機能棟十名の三棟体制になり一人ひとりの居住空間にゆとりが持てるようになりました。通所・居宅・相談は支援棟内に新たな居を構え、一つの建物内に四つの事業が動く建物の名の通り「多機能」となりました。完成後、やっと生活スタイルも安定してきました。利用者様のより良い環境での生活を提供できるように心機一転支援していかせてもらいます。

神父さまの錯覚

山下陽一

ひとみちゃん逝く

一昨年（二〇二一年）五月、E TV『ごころの時代』で長崎市にあるカトリック教会（浦上教会）の日神父の活動が紹介されていた。

すでに三七年前の体験を語っているのですが、今日でも起こっていることで、「ひとみちゃん」という少女の家庭のできごとを紹介していました。ひとみちゃんの家庭は貧しく、父親は飲んだくれ、母親は病弱で仕事も休みがち。信徒の子どもたちは小学校一年生の時に教会学校に参加するのですが、ひとみちゃんは読み書きができず、あまりしゃべりませんでした。セーターを重ね着し、ハナを垂らしている、ときにはパンツもはかないで教会にやってくることもありました。そんな家庭なので教会の人たちによる身の回りの世話が必要で子どもでしたが、とてもきれいで澄んだ瞳をしていました。

ある時、子ども達の間でお金が無くなり、その犯人がひとみちゃんらしいという疑いをもたれたのです。神父さまはひとみちゃんに「お金を取ったのか？」と尋ねると、済んだ目で「ううん」と首を振って否定したのです。やがてそうでない事がわかり、犯人扱いした子

が『ごめんね』という、「うん！」と頷いたのみですぐに仲間たちと遊びはじめたということでした。

ある日彼女の家族から緊急電話が掛かってきました。「ひとみが動かないよ！」と父親。これを聞いた神父さまは急いでひとみちゃんの家に駆けつけました。するとシーツも掛けてない粗末なせんべい布団にひとみちゃんがエビのようにうずくまっていて、手を尽くしても息を吹き返すことはありませんでした。神父さまは家族に「なんでもここで放つといたと！」と悲しみとともにやり場のない怒りで父親を激しく叱りつけました。

ひとみちゃんは一人で寂しく短い一生を終えました。棺のひとみちゃんの死に顔はスマイルが咲いたようにきれいで、神父さまはひとみちゃんに語りかけました。「ひとみ、つらかったねー、きつかったねー」と言いながら顔を撫でていると、はつきりと声が聞こえたそうです。「神父さまごめんね、お父さんやお母さんを責めるとしてね、お願いだから許してやってね」と。ひとみちゃんは他の子にはない過酷な境遇で生きていながら、毎日許しを請うことを折っていた子どもだった、そしてその短い命を終えたとき神父さまは追懐するの

神父さまの錯覚

逃げ場がない子どもたちが親の虐待を受けて人知れず亡くなっている、そのような事件が今日も数多く起きています。子にとつて理不尽な親の折檻を受けながら、ひとみちゃんは「許してやってね」と聞こえたとき神父さま述べているのですが、このことは今の現実の社会で共感することができませんか。浦上教会の神父さまにはつきり聞こえたというのは、身の少女が亡くなったという実感に欠けているのではないか？これはでき過ぎた錯覚ではないか？信仰を持つ者の本質として「許してやってね」として納得してよいのか。これは二千年以上前イエスを十字架につけたゴルゴタの丘のできごとではないのですか。

ひとみちゃんはその境遇に苦しんでいたに違いない。死因は急性肺炎とされていたようですが、せんべい布団のひとみちゃんはエビのようにこごまって亡くなっていたのです。その状況から推定すると、咳込みが激しく気道も狭窄し呼吸もできず胸をかきむしる程苦しみながら亡くなったのではないかと容易に想像できるのです。

神父さま、こんなことをいうではありませんか「主の苦しみを忘れまじ」

記憶とつひひき出

歌人・河野裕子は少女時代を当

地石部の街道筋で過ごしました。夫で歌人である分子生物学者・永田和宏は河野を痛で亡くしたあと、次のように詠っています。

わたくしは死んではいけない
わたくしが死ぬときあなたがい
ほんとうに死ぬ

（たとえば君）

身まわりでいた人が逝ってしまったとき、その納得に落し所を得ぬままに永い時間を過ごさなければなりません。亡くなった人との記憶はきわめて個人的で、あの時あの場所のできごとは他の誰も知らない自分とその人だけのものなのです。これら一つひとつの記憶は無数の「引き出し」がある棚のようなものになっていて、しかもその一つひとつの「引き出し」は中身が化石の標本ではなく、記憶をじっくり熟成させる装置のようなものだと思います。あの時あの場所の一つひとつの些細なできごとは熟成によって芳醇な香りをもつものに仕上がりに、時に鮮明な動画として突然蘇ることもあるでしょう。この装置が働いている限り逝った人と語り合うことができ

るのではないかと。

最後に前掲の『たとえば君』から河野のまつごの一首

さみしくてあたたかき世
にて会ひ得しことを幸せと思ふ

（河野裕子）
残った者こそ逝った人に深遠の感謝をささげなければなりません。

「元生活」に気づいて

落穂寮長 太田正則

新型コロナウイルスによる感染症が広がり始めて二年が経過し、その後も変異を繰り返して今なお猛威を振るっています。当寮の感染防止対策も長期に渡り、私自身も含め職員全員が所々で気を引き締め直して感染対策に取り組まなければ、ともするとなあなあな対策となつて気が付いた時にはクラスターの発生となつてしまいかねない状況です。利用者さんはこの環境に慣れてこられたようにも思いますが、見えないところでストレスが溜まっていて、目に見えるころには大変困難な支援が必要になるかもしれないと考え、早く元の日常に戻れたらと思います。この「元の日常」について、「普通の暮らし」とか「一般的な生活」などと表現される状態を想像されることと思いますが、さて、この「普通の暮らし」の普通は何を指すのでしょうか？私達は自分の価値基準で物事の良し悪しを判断し、言動を取捨選択して日々の生活を送っています。そして、利用者支援にお

いてもそこを基準として暮らしや活動の内容を組み立てて提供しています。「一般的な生活」と言えば当然日々の生活の中の労働に該当する日中活動と、余暇を含む暮らしの時間とに分けて考えられると思います。当寮でもそれが「当然」と捉えて日常生活内容を組み立てて提供しています。この「当然」という価値基準が果たして「当然」なのかという疑問が、このコロナ禍で私の中に疑問として現れました。利用者さんに充実した生活を提供することは、いわゆる「職住分離」という考えが当然であり基準である。それを行わないことは事業として、職員としての怠慢であると捉えて、何がなんでもその体制を維持できるように人的・物理的に環境を整えてきましたし、実際に支援提供もしてきました。しかし、コロナ禍の中、利用者さんや職員の中に体調不良者が出るたびに感染を疑い、万が一に備えて棟単位で隔離封鎖を行うため、利用者さんの活動を停止せざるを得

ない状況の繰り返しとなりました。つまり「職住分離」が殆ど出来ず、一日を通して暮らしの場での生活となつてしまいました。

この状況は利用者さんにとってかなりストレスが溜まることになり、大変な状態になるのではないかと危惧していましたが、ふたを開けると予想外にも大きく崩れる方は殆ど見られませんでした。それどころか、中には自分の好きなことをして過ごせる時間が増えたことで、感情にゆとりができたのか、他利用者への干渉も軽減し、落ち着いて過ごされる時間が多くなる方もおられました。つまり、私からすればメリハリのついた生活活動として午前午後の約三時間の日中活動の取り組みが、利用者さんの充実した生活の提供であり、安定した生活につながるものと思っていたことは、利用者さんによっては負担になっていたのだと気づかされるものでした。これは私の「こうあるべき」と言う考え方の押し付けではないかと思いました。全ての利用者さんの「普通の生活」が、「こうあるべき」として捉え、利用者さんのためにと、周りの見方ではなかったのかと。周囲の目を気にして、「普通の生活」

の基準を利用者さん本人ではなく本人以外の基準で生活を組み立てていたのではないかと。

さて、新型コロナウイルス感染症に一定の収束が見られたとき、「元の日常」に戻れたらと書きました。しかしその「元」はこれまでの「普通」ではなく、新たな見方に気付いた「一人ひとりの普通」に視点を当て、正しくアセスメントした情報に基づいて生活を組み立てることが利用者さんの本当の充実した生活につながると思います。児童施設から成人施設へと移行し、当たり前に年をとっていかれているなかで、みんなが同じ過程で加齢されるわけではないことに改めて気づく事ができたのは、このコロナ禍に身を置いて得た大きな収穫でした。また、そこは支援者側の怠慢でもあったと思います。

「二人ひとりの普通」の取り組みが支援者の怠慢とみられないように、取り組み内容の決定過程を明らかにするなど、やらなければならぬことが沢山ありますが、職員一同改めて「明日の笑顔につながる支援」に努めてまいりますので、どうぞ引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。



男子棟

コロナ禍が続く中、男子棟の利用者さんにも色々と制限を設けさせて頂き、外出や帰省も満足に実施できない現状ではありますが、おかげさまで楽しく笑顔いっぱいに過ごしておられます。
 新たに多機能棟が完成し、男子棟でも一人一人のプライベート空間を保障できるようになりました。以前よりもゆったりとした時間の流れではありませんが、毎日の生活の中にもメリハリや気分転換を図れるよう、午後から入浴班や作業班、自立課題を中心とした、個々の能力や趣向に合わせた活動に取り組んでいただいております。
 もちろん季節の巡りに置いていかれることのないよう、春夏秋冬のイベントも忘れてはいけません。春には遠足気分でお弁当を食べたり、夏には水遊びや納涼祭でお祭り気分を味わいました。秋にはハロウィンということで手作りしたお面をかぶって寮内を練り歩きました。
 施設としてはもうしばらく月日を要するかもしれませんが、利用者さん職員一同、皆さまにお目にかかります日が来るのを心より願っております。



行事を楽しむ♪



女子棟

女子棟は、六月一日より利用者十六名となり、新しい生活環境の見直しや日課活動のメンバー編成を行いました。女子棟内の部屋数が決まっている為、完全とはいきませんが、二人部屋から一人部屋に移り、プライベートな環境の保障が可能になりました。また、午後日課活動においてはメンバーと活動内容の見直しを行い、紙千切り・織物班(粘土教室)、エコ班(棟内教室)、外作業班(棟内・寮内)、療育班(地域支援棟)の四つの班に曜日ごとに分かれて活動をしています。職任分離を考慮し、活動場所に移動し、活動を行っています。今年度から、エコ班も棟内部屋にて活動再開、主に、ペットボトル

のラベル剥がしと潰しを行なっています。棟内教室でのエコ活動に最初は利用者さんも戸惑うばかりでしたが、今では、活動時間になると自ら棟内教室へ移動し待機されています。力のいるボトル潰しですが、慣れてきたように潰すスピードが速くなりました。コロナ禍で男女一緒に活動する事が困難ですが、今後も試行錯誤しながらもしっかりと日課の保障に努めたいと思います。

さて、利用者さんが楽しみにしている行事ですが、まだまだ寮外に出て行くことが出来ませんが、寮内・棟内にて楽しんで頂くとうと、職員は色々考えて来ました。八月に行う予定だった、納涼祭は女子棟コロナ感染によって延期となり、十一月に飯盒炊爨と合同で行いました。棟内の壁を提灯の絵で装飾して、お祭りの雰囲気の中ヨーヨー釣りを楽しんでいます。また、昼食は飯盒炊爨で冷しゃぶを皆さん、美味しく食べていました。利用者さんにとって行事は、外出や帰省が出来ない分、とても大きな楽しみになっています。これからも今まで以上に楽しんで頂ける行事を計画していきたいと思っています。



日課もがんばる!!



多機能棟

まだまだコロナ禍が収まらない中、新たに始まった多機能棟での生活は、如何に利用者さんに楽しく、かつ快適に過ごしていただけるかを職員一同模索してきました。制限のある中でも、いかに充実した生活を実現していくのかを日々考え、また努力しているところです。

日々の活動としては、午前午後と時間を分けての入浴や、屋外や棟内での歩行、イベントの飾り付けの創作活動など、利用者さんと職員と共に取り組んでいます。

特に季節のイベントに関しては力を入れています。七月には七夕があり、お願い事を短冊に書いて、笹に飾り付け、お願い事が叶うように皆で星にお祈りをしました。折り紙などを使用して作った飾り物と一緒に撮影した写真の中には利用者さんの素敵な笑顔を見ることができました。イベントを通じ、利用者さんの喜ばれている姿を見ることで、また更に喜んでもらえるように精進しようと、思いを新たにすることが出来ました。

多機能棟では年度の後半に新たな職員も加わったことで、より支援の幅が広くなり、安心と安全の保障を目指す体制へと変わりつつあります。

利用者さん・職員一同、保護者様を交えて行事を共に楽しめる日が来るのを心より願っています。



NEW FACE
深乃里さん

通所生活介護

落穂寮では生活介護事業として、入所されている方に加えて、日中活動を行う通所の方も受け入れていきます。寮内ではいわゆる「通所」と呼ばれている部署になります。活動内容としては、午前中は歩行、昼食を食べ、午後は主に空き缶のリサイクル活動を行っています。十年ほど前に一名からスタートしたこの通所のメンバーも、年々数を増やして、ここ数年は男性四名の固定のメンバーで活動を続け、日々の繰り返し返しの効果で作業の量や質も年々向上してきました。そして、令和四年の四月から一名加わり五名となりました。今回加わったのは深乃里(みのり)さんで、通所のメンバーでは初めての女性となります。これまで通っていた学校とは環境がガラリと変わって戸惑うこともありましたが、今では毎日、他の先輩メンバーに負けないくらいに、歩行や作業に頑張っており組んでいます。今後の活躍を大いに期待しているところです。男子棟、女子棟などと比べても平均年齢が二十歳代と若い集団のパワーでこれからも頑張っていきたいと思っております(職員の平均年齢は触れないであげてください)。よろしくお願ひします。



支援棟の建物が新しく増改築され部屋も広くなり車椅子の利用者の方も支援しやすくなりました。利用者の方々も知的障

ある「報告・連絡・相談」を密にしながら利用者一人一人の特性を見極め、落穂寮を利用して良かったと言っている『明日の笑顔につながる支援』に努めています。

居宅介護

この二年余りで居宅のメンバーも様変わりし令和三年三月に西出弘子st、同年七月に山中仁st、令和四年四月に加藤誠志stをお迎えして、古株の荒木st、飯田の五名で日々利用者支援に奮闘しています。とはいえ長引くコロナ禍の中、活動制限もあります

が仕事の原点である「報告・連絡・相談」を密にしながら利用者一人一人の特性を見極め、落穂寮を利用して良かったと言っている『明日の笑顔につながる支援』に努めています。

害、発達障害、精神障害と様々な障害を抱えておられます。利用者の方と共に職員も成長していければと思っています。

まだまだ微力ではありますが、障がい者と健常者が当たり前に共生していける世の中になるよう情報発信していければと思っています。

今後とも皆様の温かいご支援ご協力、よろしくお願ひいたします。



左から山中 st、西出 st、加藤 st

ありがとうございます

公益財団法人ダイترون福祉財団様 20周年記念助成金事業



二十周年記念助成金事業にて、助成金を頂きました。
移動式リフト・スリングシート
(助成額417,000円)
多機能棟の利用者・職員共々身体的負担が軽減
され安心してできる環境で過ごせるようになりました。

社会福祉法人滋賀県共同募金会様 令和4年度赤い羽根共同募金



「滋賀の町を良くする
しくみ」助成事業にて、
助成金を頂きました。
電動介護ベッド
(助成額242,000円)
居宅介護事業におい
て、車いすを使用され
ている利用者様に適切
な支援を行うことがで
きるようになりました。

ご協力 ありがとうございます

〔寄附金〕

シガ 技 研
森 本 満 子

〔物品の寄付〕

山 本 里 子
坂 本 フミ江
黄之瀬 節 子
加 屋 隆 士
原 田 隆 和

〔寄贈〕

河本文教福祉振興会
〔洗濯機〕

(敬称略)

社会福祉法人椎の木会及び落
穂寮の運営にご協力いただいた
方に、この場を借りて御礼申し
上げます。

今後変わらぬご支援、ご協
力をよろしくお願い致します。
ありがとうございます。



久しぶりの広報発行となりました。日々の業務に加えて諸々の事象も影響し、発行まで時間がかかってしまいました。申し訳ありません。さて、諸々の事象の一つでもある、コロナ禍も今年で約四年目となつてしまいました。落穂寮でも残念ながら利用者、職員とも感染する方が出てしまいました。幸いにも重症者はなく、現時点では皆さん無事に回復されています。しかし、今後も油断できない状況が続きます。利用者さんも帰省が出来ないまま、ご家族との面会で我慢してもらっている状況が続いています。まだ辛抱の時間は続きそうですが、「明けない夜はない」と信じて乗り越えていきましょう。

木

言

火を見る

何十、何百年と

木々が内に留めた

太陽の光と熱が

瞬間を躡っている

